

生徒が成長できる、生徒がいい学校に来たなと思ってくれる、そういうところにしていくっていうことが一番だね

語り手 小川 多聞 (元中学教頭)

聞き手 角田 優斗

*

教員になるまで

—今日はどういう経緯で大学に入って、英語の教員になることにたどり着いたのかを聞きたいなと思って。

高校は、僕、立命館中学校に入学したんだけど、最初、自分は中学校受験なんかする気全くなかったんです。だけど、うちの母親は田舎のおばちゃんんだけど、教育に関してすごく色々考える人で、「生き方って、環境によって決まる人が多いから、いろんなタイプの人が集まるところに行った方がいいという考えを持っていて。僕もそれには賛成だったけど、受験までする気はなかった。けど、「試しやからやってごらん」って言われて割と気楽に受けたって感じかな。僕は京都南部の公立小学校出身で、小さいコミュニティ社会にいたから、思い切って外に出るのもええかなぐらいの感覚でしたね。でも、今となってはその経験って大きかったと思う。だから、学校の教員になってみて、学ぶ環境とか人との関わりが、将来にすごく影響を及ぼしていくのを体感したし、それが教員になる一つのきっかけにもなったかもしれないですね。今から思えばね。友達といろんな経験するのは刺激的だったな。中学校のスキー教室も、友達同士で結構長い間一緒に行ったり、みんなで旅行行ったりとか、学生だけで行動することがごく自然に身についていたしね。

立命館大学へは内部進学試験があったけど、高校ではふらふらした生

活してたんで、とても「楽勝」っていう感じでもなかったなあ。大学行けへんかったら恥ずかしい気持ちもあったから、二年の終わりから、焦って勉強した記憶がある。極端な話、高二の一学期の成績がすごい悪かったからうちの母親なんか学校へ呼び出されて、「このままじゃ大学の内部試験合格できませんよ。」「三年生の進級も危ないかもしれません」と言われたそうやねんね。それを聞いて、「それは流石にまずいかな、そこまで来てるんやったら」と思ってたね。二年生の二学期ぐらいから、ちゃんと勉強しましたねえ。

勉強したら、知識も増えるし、授業の内容もすごいわかってくる。理解も深まるだけじゃなくて興味も膨らんでいくので、いい方向で勉強できたのが二年生の後半ぐらい。それまでは、全然勉強せえへんかったな。実は、勉強って中学校の時も高校の一年生の間もほとんど勉強した記憶がない。二年生になって、そこで初めてちゃんと勉強するようになった。やってみたら。それなりに価値はあるなって実感できた。

結果的に、なんとか内部入試で、前の年度にできた産業社会学部に進学することになった。幅広く勉強できそうやし、大学入ってからでもいろんな道探せそうだからっていうので進学した。将来、先生になろうとか、どこかで働こうとか、そんなことは全く考えていなかった。

まだ小さい頃、うちの母親と雑談をしていた時、「外交官がええんちゃうか」って言われたことがあってな。当時は、外交官が何する仕事かもよくわかってへんかったんやけど、その言葉だけは妙に記憶に残ってた。後になって考えると、外交官って、国の代表となつて、他の国と交渉したり、自分の国の立場を相手に理解してもらったりする、責任の重い仕事やな。というイメージは持ってたんやと思う。難しくとても無理とは思ってたけど、「外に目を向けなあかんやん」って言われたことは、無意

識のうちに自分の心に残ってたんやろなあ。入試に受かったら、「四年間のうちに一度は自分で海外に行こう」と思うようになった。きちんとした留学もいいけど、とりあえずは、ぶらぶらとあちこち歩いてみたいになっていいのは、なんとなくあった。大学入学と同時に、産業社会学部の勉強は正直ちよっとおろそかにしつつ(笑)、英会話学校に通い始めて、海外に行くための準備を始めたんよ。アルバイトをしながら、英語の勉強してたんやけど。

ちよどその頃、通っていた英会話学校の日本人の先生に、そんな話をしてたら共感してくれて。「私ができることはなんでもするよ」って言うてくれて、ビザの取り方の相談とか、知り合いの紹介とかまでしてくれた。将来の展望についてとかも話す機会もあった。その先生は、非常勤で学校の先生しながら、英会話学校の先生もしてはって、「学校の教員もいいよ、夏休み長いもん」なんて冗談まじりに言われたりもした。

学校の先生って、人の生き方に影響を与える仕事やし、社会的にもそれなりに存在感がある職業やな、というイメージもあった。それで、「じゃあ一応、教員免許取るための単位も取っとくか」と思って、大学の二年生から教職課程の単位を取り始めた。特に英語の先生になりたいと思うていたわけではなかったけど、とりあえず「アメリカを見てやろう」という気持ちの方がずっと強かった。

ただ、アルバイトもしながらで、単位もギリギリやったから、アメリカに行く準備をしていた二年生後期の半ばごろ、とうとう先生から呼び出しを受けた。「取れてる単位数がちよっと少ないけど、きちんと出席してますか」と言われてな。「あ、バレてる」と思って、「こういう理由で・・・」と一応言い訳をしたんやけど、「理由はどうであれ、単位はしっかり取得してください」と言われた。教職の登録もしてあるし、登録単位数が一

般の学生より多いから、「曖昧にしてたら、もう絶対に留年しちゃうよ」と言われたんやね。それは流石にあかんなと思ったねえ。その頃、貯金も半分以上貯まり、海外へ行く準備も本格的に始める時期やったのに、ここで勉強をせんかったら全部が中途半端になると思って、そこから本気で勉強し始めた。二年の後半になってから慌てて勉強するあたりは、高校の時と一緒やったな。

そしてアメリカに行ったんよね。今でこそアメリカ旅行なんか普通やと思うかもしれないけど、当時はビザ取るにも領事館での面接があつて、注射も受けなアカんし、準備は結構大変やった。現地で泊まるところも決まっていなかったしね。

最初はロサンゼルスに着いたんやけど、もうどこへ行ったらええか全然わからへんかったから、とりあえずグレイハウンドのバスの出発口へ行こうと思った。夜は危ないと聞いてたから、朝に着くところを探そうという感覚やったな。

タクシーで向かったグレイハウンドのバス乗り場は、ダウンタウンの中でも一番治安が悪いと言われるような場所で、タクシー降りたら、その辺でおっさんが路上で寝とるみたいな光景が広がって、正直かなり不安やったね。びくびくしながら、一ヶ月有効のバスパスをチケットカウンターに持っていったら、バスのルート図を見てたら、朝にオークランドに着く便があつてね。一番最初は朝八時か九時頃着くところがないかなと思って探してた。西海岸をまっすぐ北上すると、サンフランシスコの手前にオークランドという町があつたから、そこに着くバスに乗ることにした。

荷物を積んでもらってバスの中に乗ったけど、結局一晩中起きてたな。お腹はペコペコやったけど、どこでなにを食べたらいいのか全然わから

へんかった。朝、オー克蘭ドに着いて、汚いところやったけど、横にあったデイリーで、アメリカ初めての食事をした。ちゃんと会話が通じたり、相手も割とフレンドリーで、「言葉ってええよな」と思ったんよね。

その後、アメリカの州の半分以上を、バスで回ったわ。中学入試の時に、思い切って外に出てみようとした縁が、どんどん広がっていったんやと思うかな。いろんなことを理解したり、自分を理解してもらったり、何かしたいことを伝えようと思った時に、どんなスキルが必要なんかを身を持って知った。まさにリビングストラテジーっていうか、生きていくための戦略を身につけてないとかあんのやなと感じたな。親切にしてくれる人はたくさんいるけど、礼儀正しくせえへんかったら、親切にもしてもらえへんし、相手からの信頼も得られへん。そういうことを、実際の体験を通じて身につけていったんやと思う。広く世界の中で、英語を使えることの重要性もすごく感じるようになった。それでかなあ、英語の先生もええなと思うようになったのは。

ただ、英語の先生の免許なんてそう簡単に取れるもんやない。だからまずは社会の免許を取ろうと思って、大学の勉強にはちゃんと向き合った。自分の道は自分で切り開かなあかんと思ったから。信頼されることの大切さを理解して、いろんな経験を積んで、豊かな教養や力も身につけた人間になりたい、そんなふうに漠然と考えていた。でも、そういうもんには近道はないとわかっていたから、大学の後半二年間は、すごく勉強した。たぶん、それまでの中で一番勉強した時期やったと思う。世界の中で起きてる課題をきちんと理解して、それに対して自分なりに手立てを考え、提案できる力を、経済と法律の両方の視点から学ぶ学部やったんよね。単に経済、法律を学ぶだけじゃなくて、実際に起きている社会課題を見てそれに対してどう向き合い、どう提案するかを考える。

そんな学びやった。

とはいえ、帰国して一年したら採用試験がある。でも、採用試験ってそう簡単に採用されるようなもんやなかった。当時は結構難しかったよね。実際に受けてみたけど全然合格できる実感はなかった。「これはどうしたらええんやろ」と思ってたね。非常勤とかやったら、病気で欠員が出たり、女性やったら産休もあるし、短期間の仕事が出ることもある。「いろんな学校に声かけたり、講師登録してみたらええんちゃうか」って教えてもらった。免許取れる可能性のある人は、講師登録ができたから。知ってる学校を回って、非常勤があるか聞いたりもした。そしたら、「非常勤でよかったら、時間はなんとも言えへんけど」っていう話があつてな。

そうそう、その少し前やけど、社会科の教員としてはなかなか道が見えへんかったから、「やっぱり英語の免許も取ろう」と思ったんよ。二つ免許持ったら、絶対強いと思ってたな。もう一つ別の教員免許を取るために、「学士登録」という制度があるので、それを申請して、英語の免許を取ることにした。英語の免許を取る勉強をしながら、塾とかアルバイトできるところがないかなと探したら、今の話につながっていた。大学の担当の方もいい人だね。最初は昼間の時間帯で登録してたんやけど、当時まだ大学に夜間があった。二部がね。時間的には差し迫っていたと思うんだけど、事情を説明して変更してもらえた。せやから、昼間は先生として働いて、大学は夜の二部に行って英語の免許を取る、そんな生活をしていた。

英語の勉強っていうのは、実際に使って初めて成果が出てくるもんやと、その時によく分かった気がする。それまで学んできたことは少し違う視点が持ってたのも、英語の免許を取ろうとしていたからやと思う。

当時は「なんでも当たり前のようにできる先生になりたい」くらいの漠然とした思いしかなかったんやけどね。

その中で、学校へ行ったら、「もう小川君な、社会やめて英語教えられるか」って言われてな。「いや、僕はどうかかわからへんし、免許もまだないですよ」って言って。「免許はなくても、大学の卒業資格はあるでしょ。社会の免許持つてる。今、大学で英語の免許を取るために単位取ってるよね。臨時免許は申請したらいいから」って言われたんよ。実際に申請したら、すぐ認められて。そこからずっと英語を教えることになった。それ以降、社会って教えたことは一度もないんやけど(笑)。二年ほど経って英語の免許も取れて、その学校でそのまま教え続けることになった。「いつまでも非常勤ってわけにいかへんしなあ」と、校長先生と話していたら、「じゃあ、専任採用しよう」と言うてくださって。それが今に繋がる一連の流れかな。

*

立命館守山の基盤作り

—そこから、立命館守山の教頭になられて、現在の立守の基盤を作ってこられたのですか。

立命館はもともと、守山女子という学校があって、その守山女子自体が、守山市立の学校で、経営上、厳しい状態だったと聞いていた。学校経営危機に陥ってしまったら、在籍している生徒が大変なことになる。それで、「学校として引き継いでいこう」という判断がなされ、立命館が引き継ぎ、合併という形で関わることになったと聞いている。ある意味では、守山市の財産を私学に譲るみたいな形にもなるから、当時は反対運動もあったけどね。状況を理解している人たちは賛成し、期待してくれたと思う。

立命館として新しい学校作りを進めるにあたっては、「どんな学校にしたいか」、「自分が通いたいと思える学校やないとかかん」という話になって、「じゃあ、どうしたらそんなに学校なんやろう」、「時代の中でリーダーシップを取れる生徒は、どうやって育てたらええんやろう」という議論が当時の大きなトピックやった。

その中の柱の一つが、「グローバルに活躍できる生徒を育てよう」という考え方やった。「将来を展望できるような教育をしてる学校や」と、誰が見てもわかる学校にしよう」と。そこからいろんな取り組みが始まっていくんやけど、学校が潰れちゃうとか、生徒が集まらへんとか、そういうレベルの心配をせずに、理想を追いかけることができたのは、本当にありがたかったな。

学校の先生って、人の生き方に影響与えられる仕事やと思う。社会的にもすごい意味のある仕事やしな。だから、「グローバルの力って何」ってことを、保護者や生徒にわかりやすく説明できるようにするのが大変やった。僕らが考えていた「グローバルな力」っていうのは、日本の高校生がアメリカやイギリス、その他世界の高校生と一緒に、気後れすることなく、世界の課題について協力して考え、方向性を出せる力のことやと思う。自分なりの考えを持って、ちゃんと表現できて、相手と意見を交わして、場合によっては相手を説得したり、自分の意見を修正してでも、より良い結論を生み出せる。そんな力やね。そのためには、世界のいろんなところで起きている課題に対して「自分の意見を持てる」ようにせなあかん。そのために必要なのは、課題のメカニズムや、原因をきちつと学ぶ姿勢やと思っていた。それらをまとめて、「グローバルな力」、「国際的な場で活躍できる力」っていうのを「一つの学力として学校で教えていくべきだ」という考えやった。

そうした中でまず、立命館宇治ができて、英語教育が強化された「国際的な学校」として文科省の様々なプロジェクトにもどんどん参加した。グローバル教育の先端に立つのはきつかったけど。ただ、言語ってというのはツールであって、コンテンツそのものではないから、コンテンツも一緒に勉強しなアカン。せやから、英語だけじゃなくて、自然科学や社会科学、いろんな文化背景を含めた学びが必要やと考えていた。だから、国語も英語も、フランス語もドイツ語も中国語も学べるような空間を作りたいと思っていた。そういう中で英語教育の方向性を作っていたけど、これでも僕にしてみれば、まだまだ未完成やと思ってる。本当は、教科の枠を超えた学びのプログラムを作りたかった。それはずっと言い続けてきたけど、結局、実現できずじまいやった。けど、今はそれに近い教育がいろんな学校で実践されているよ。

その後、守山の中学校を作る時に、当時の小島校長先生、僕の先輩で、前の学校でもお世話になった方から、「新しい中学校を作るんやけど、教頭してくれへんか」と声をかけてもらった。当時、宇治で文科省の仕事があと一年残ってたけど、後を任せて守山に来た。

中学校は自分にとって教員志望の原点、中学校を創っていくことは大変魅力的な仕事と感じた。というのが大体の流れかな。

*

教師人生の苦勞

―最後になるんですけど、先生の教師人生の中で、一番苦勞されたことは何ですか。

これはね、記事にしづらいかもしれへんけどな。僕はほんまに、いろんな人に恵まれてきたと思ってる。今も、「リッツ・キッズ」っていう小学生向けの英語学習プログラムをやってるけど、一緒にプログラムを運

営している人たちは、本当に素晴らしい人たち。守山の中学校作りの時も、周りの先生方がよく協力してくれてすごくいい仲間に恵まれた。

でもね、反面、苦勞したのは「教員対応」やったように思う。本当にごく一部の人のけど、「あなたは生徒に対して、何をしたいのか」「自分がロールモデルであるということを、ちゃんと意識してるんか」って伝えても、反応もなく、自分の意見も言わない、協力もしない、そんな人もいた。生徒には、そういう姿を見せたくないやん。一緒になって方向を考えられたらよかった。でも、それができひん人もいた。一生懸命、次のこと考えてるのに、冷たい目で見てくるような人もいてな。そういう人たちとも、もつとうまく協力して、教員集団全体をまとめられたらよかったと思う。もちろん、多くのいい人たちに恵まれてきたからこそ、余計にそう感じるのかもしれないけど。せつかく入った先生が、途中で辞めていったこともあったし。自分の力不足もあったと思う。教員としても、リーダーとしても、もつとできたはずやと今でも思う。まあね、教頭って、そんな仕事なんやと思う。先生方一人ひとりに、しっかり向き合わないといけない。何年もやらせてもらったけど、まだまだできへんかったと思うね。もつとできてたらよかった、というのが、一番の反省かもしれへん。

―やっぱり、先生方をまとめるのが難しかったってことですか。

いや、「みんなをこっち向かせてまとめていく」なんて、そんなおこがましいことは考えてない。野球部のキャプテンみたいな。みんなが同じ目的、同じ勝利に向かってるならそれもできるかもしれへんけど、学校には、そういう「一つの勝利」ってないやろ。本当に、いろんな方向を向きながらやっていかなアカン。

ただ、最終的に共通しているのは、「生徒のため」。生徒が成長して、

「ええ学校来たな」と思ってくれる。そこに向かって行くことを、精一杯してきたつもりだけど、もしかしたら、もつとできたのかなあと思ってる。

―お話、ありがとうございました。

いやいや、大した話と違うけどこうして思い返してみると、結構いろんなことをしてきたなと思う。自分が育った立命館の中高で、自由のびのびさせてもらった時間も、ちゃんと意味があったんやと思う。また、足らんとこあったら、メールでもなんでも連絡してください。

【感想】

先生の学生の頃の行動力には本当に驚かされた。いろんなことに挑戦し、積極的に行動されてきたからこそ、広い視野を持ち、将来の可能性を大きく広げてこられたのだと感じた。また、「大人同士でもコミュニケーションが難しい」というお話を伺い、改めてコミュニケーションの重要性を実感した。私も、将来社会へ出た時、少しでも自分の力になるように、今のうちから行動力を高め、コミュニケーション能力を向上させ、自分の目標に向かって突き進めるような人になりたいと思った。



右：語り手 小川 多聞さん

左：聞き手 角田 優斗